男女共同参画の視点に立った防災　～もしもの時、どうする？～

令和元年10月、関東・甲信地方や東北地方などに甚大な被害をもたらした台風第19号は、高崎市内にも、住宅の浸水など大きな爪痕を残しました。身の危険を感じて、市内の避難所に避難された方もいました。そこで今回は、地震・風水害など、いつどこででも起こりうる災害について、男女共同参画の視点から考えてみたいと思います。

●過去の大規模災害から学ぶ避難所生活

避難所では、限られた空間の中で、高齢者・障害者・妊産婦・乳幼児のいる家庭、病気を抱えている人、外国人、性的少数者など…様々な境遇や立場の人たちが慣れない集団生活をしなければなりません。

東日本大震災や熊本地震などで避難所生活をした人の声

- ●授乳や着替えをする場所がなく、周りの目を気にしながら着替えるのに苦労した。
- ●高齢者が避難所になじめず、半壊状態の家に戻った。
- ●発達障害の子どもが周囲に迷惑をかけるので、車上生活をした。
- ●男性の目が気になって下着などが干せなかった。

- ●高齢で足の不自由な父が「家にいる」と言い張り、避難させるのが大変だった。
- ●復旧・復興の仕事で過労が続き、体調を崩した。
- ●職場から離れられず、避難所にいる家族と一緒に生活できなかった。
- ●新たなコミュニティーに入ることができず、孤立や引きこもりにつながるケースもあった。

このような課題を解決するためには、女性や高齢者、子どもなど多様な視点で避難所環境を見つめ、地域住民が中心となって安全で安心した避難所環境を整えていくことが重要です。

高崎市ハザードマップ　―災害から身を守るために―

A1サイズ1枚のマップ形式で、片面に危険箇所、もう片面に防災に関する情報を掲載しています。自分の住む地域にどんな危険があるのかを知って、日頃からの備えやもしものときの避難に役立ててください。

高崎市ハザードマップ　検索

●「もしも」に備える

大地震や頻発する局地的な集中豪雨…「災害は必ず来る」という前提で、自分に何ができるか考えてみましょう。

【非常用持ち出し袋】

非常用持ち出し袋には、誰にも必要なものを入れたあと「自分にとって必要なもの」をプラスしましょう。

【備蓄品】

各家庭で、最低でも3日分の飲料水や食料品を備えましょう。

●地域とつながろう

災害時に頼りになるのは、普段からの人間関係です。日頃から、地域の行事やボランティア活動などに参加して、地域の人たちとの交流を深めておくことが大切です。

日本防災士会 群馬県支部　副支部長
わんだふる代表　赤羽 潤子さんに聞きました。

高崎市は災害が少ないと感じていませんか？
昨日まではそうでも安心はできません。高崎市の直下を通る「深谷断層帯」、局地的な集中豪雨…いつ自分が被災するとも限りません。
もしもの時のために、「自分で（自助）」、「地域で（共助）」備えましょう。災害時、「行政の支援（公助）」にはある程度の時間がかかります。そこで、近所の人たちで助け合う「地域防災」が重要になってきます。助ける側も助けられる側も、普段から知っている間柄であってこそ力を発揮します。
市内の多くの町内会では、「自主防災組織」が結成されています。避難訓練や避難所運営訓練などがある時には、ぜひ参加してみてください。避難所は日常生活の延長です。困難な状況の中でも、より安全で良好な生活が送れるよう、女性が積極的に運営に関わることも大切です。

平時にできないことは、非常時にもできません。普段から、様々な立場の人たちが、ともに責任を担いながら支えあう地域や社会づくりをしていきましょう。